

創刊元年2月1日創刊（種別無期認可）
平成16年2月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 第25巻第2号

俳句雑誌「おき」

沖

2月号



沖
発行所

微笑 林 翔

遠火事や靴穿きかけて又脱いで

冬桜涙のあとの微笑とも

杜を背に舞ふよ綿虫数知れず

柚子実る真上の空やそこだけ青

示扁と衣扁

同人作品の選をしながら、誤字に気付けば、赤ペンで直しているのだが、いつも「困ったものだ」と思うのは、「示扁しひんと衣扁いへんの誤用である。

示扁は普通、片仮名のネの形で書かれるが、「神」の字で代表されるように、精神的或いは運命的な言葉に用いられる。示を二と小に分解すると、二は天の古字、小は川の変形したもので、示は天地を表わすわけである。壮大な天地ならば、精神にも運命にも結び付くであろう。

「神」のほかに例を挙げれば、社・祈・祉・祝・祖・福・禍・禰・禪・礼などがあり、皆、精神的或いは運命的な意味を持つ字なのである。

衣扁の字については、多くを言う必要もなからう。皆、衣服に関する字なのである。快・衿・襟・被・袖・袴・襦・袴・袷・袷・褌・襦・襦・襦などがある。一見して衣と関係なさそうに見える字では、初・裕・複などが挙

冬の蠅腹をそんなに見せるなよ

脚組めば脚は斜めや霜柱

冬至風呂忘れたくなき事忘れ

指の爪伸びてゐしかな数へ日を

緋絨毯に心も燃えよ初句会

面影の君も老ゆらむ鳥総松

げられようが、初は織り上げた反物に初めて刃物を入れることから来ており、裕は豊かな生活を贅沢な衣服で代表させたものであり、複は衣を重ねて着ることから来ている。

登四郎句集『羽化』から、示扁の字・衣扁の字を含む句を挙げよう。

社家らしく島の四戸や朴の花
秋空に祝はれて老忘れけり

青き能登師の地父祖の地わが名の地
まだ闇の匂ひの中の初あかり

やや派手な単衣と思ひ袖通す
今日白露衣まとふ間の裸身に

衣扁の字は多用されているが示扁の字は少ない。他の俳人に於ても同様であろうと思う。

林
翔



翼

能村 研三

地方歳時記の意義

三年前から、故沢木欣一先生の後を受けて金沢に本社のある「北国新聞」の「北国俳壇」の選を担当している。能村家が能登や加賀にゆかりがあるので、自分にとつても意義のある仕事と思つて引き受けさせていだいた。

新聞の投句は、北陸独特の祭りや行事、人々の習俗も詠まれているので、選をする方も勉強しなくてはならない。

ところで、その「北国俳壇」の創設百年を記念して、「北国俳句歳時記」が刊行された。六百ページに及ぶ大冊で、一九〇三（明治三十六年）年から現在に至るまでの二五〇〇人余りの作品約一萬五千句で構成されている歳時記である。改めてこの欄の歴史的な重みを再確認した。

新聞に俳句欄が設けられたのは明治時代で、現代のような俳句雑誌や結社などの媒体がなく、新聞が文学運動の論争の場としても大きな役割を果たしていた。新聞を中心とした俳壇隆盛の動きは、中央にとどまらず地方新聞にも次々と波及し、文芸的土壌が醸成されている金沢にも、

川と川音なく合うて寒暮かな

枯蓮の透きし向うに父の墓

上州の土を馴染ませ葱囲ふ

旅ひとり寒威の景を迎へ討つ

創作のつまりはひとり寒波急

皮衣の一筋縄でゆかぬ人

出初式鳶の反り身を濃くしたり

初夢になくてはならぬ翼かな

人日やわが町にまだ知らぬ道

つまやかに薄氷籠めの一羽毛

そのうねりはいち早く波及した。

革命の裏切をして墓参かな

室生屋星

蚤捨てし裏川蚩飛ぶ夜に

河東碧梧桐

吹雪く道ときに輝く木もありぬ

西村公鳳

雪原に軍馬円舞の脚高く

沢木欣一

月光が部屋に一杯林檎囀る

新田祐久

風の中呼び止められし寒の僧

市堀玉宗

ここに挙げた作者名だけでも錚々たる方々が続くが、今では見られなくなつたそれぞれ時代の風俗、歴史が詠みこまれ、この歳時記から北陸俳壇史の百年がしっかりと浮かびあがってくる。

また、北陸特有のあまめはぎや春鰯の句なども収載され、地方歳時記ならではの特色が生かされている。

能村研三



蒼茫集



冬夕焼 坂本俊子

冬夕焼男は杭となりて立つ
顔見世へ暗き水面の川渡る
病人のときどき目覚む石路日和
綿虫となりて母来る日暮どき
十二月の水くらくらと高瀬川
燃やすもの女に多し年つまる

棚田 中尾杏子

地ビールのうすき濁りも小春かな
冬薔薇に「いちばん星」といふ名札
冬に入る棚田やおくに仏の目
胎内にねむるがごとし棚田枯れ
一湾を刺す日矢太し年忘れ
裸木の影の先までかく尖る

雪吊 鈴木良戈

耳朶固く木枯一号つのりけり
貨車過ぐる音を聞きつつ波郷の忌
雪吊の流るる雲を透かしけり
とまり木にゐる気安さの温め酒
七五三青空抜けてしまひけり
青き香を深く吸ひをり畳替

肩 長谷川鉄夫

夜のバス肩の落葉も乗込めり
敷石に黄葉の貼絵雨上る
妻退院燦燦と街黄ばむ中
フードにも馴れ初めての冬休
来週はいよよ数へ日昼に酒
白息の列さんざめき登校す

潮鳴集



冬 銀河 宮坂恒子

枯れ果てて野は忘却のやうなもの
枯るるてふ明るさ鳥の声澄めり
冬晴を吸ひたましひをふくらます
冬銀河身のぬくみもて子を包み
山国の空きしきしと寒波くる

幽かな音 柴崎英子

三之町二之町飛驒の秋惜しむ
枯露柿の軒ひくくして日本海
霜踏んで直言すこし距離をおく
松手入れ空に幽かな音降らし
青竹の切口白し風囲ひ

冬 薔薇 福山広秋

一輪に冬の陽集め薔薇咲ける
蟻螂の枯れて己に生きにけり

句の推敲重ねし果ての湯ざめかな
大噓 顔整へてより 発言
携帯電話数へ日の世に戻さるる

ほくろ 横山淑子

しぐれ降る柿の木坂の八百屋の灯
銀盃に溢れむばかり冬の月
霜のこゑ月は素顔を曝したる
干網に誰か挿したる鳥瓜
奇術師の双子のほくろ 日短

目鼻だち 松井志津子

流星に音なき不思議波騒ぐ
冬うらら車の目鼻だち賞でて
鹿が角突き合はせぬる神の留守
秋刀魚休漁船かけ上る水かげろふ
鮫鱈鍋ぐらりと夜の海荒るる

沖作品



能村研三選

愛媛

渡部 義雄

星一つ見つめて冬の遠からず
揺れながら一粒となる芋の露
記憶よきことも罪なり十夜婆
寂寞と鴉を殖やす神無月
果報など待つあてもなし雁の空
指太く古い寒雀とも親し
にはとりのまなぶた重くとちて雪
ぬと高き遍路のひとり小春風
物捨つる弾みつきたり初木枯
山腹は杉の若木や日記買ふ
生姜派も削り節派も新豆腐
妙義嶺の鬢くつきりと冬はじめ
月光を纏ひて鴛鴦の深ねむり
濃く薄く山並幾重紙を漉く
木枯の野を熱くせり持久走
遠枯るものうつくしく眼鏡拭く

東京

坂 ようこ

千葉

鈴掛 穂

東京

福嶋千代子

長野

矢崎すみ子

千葉

深田 雅敏

京都

子安 教子

磔刑の冬満月の出副都心
笹鳴のうつそみを恋ひ篠の奥
大榎の実のしたたかに闇を打つ
奥飛驒の句碑の別れや夕紅葉
カルデラに決壊の跡鳥渡る
人の待つ湖へ白鳥回帰せり
照柿や小径を挟む合掌屋
朝日差す冷たさに置く竹箒
水と火の記憶の土偶山眠る
時雨るるや阿武隈川は鋼いろ
狐火やぬれ煎餅をかみしめて
狐罨畑泥棒へ仕掛けよか
大年の河遡りくる潮かな
綿虫の浮力この世と思はれず
茶が咲いて身ぬちに淡く灯るもの
朝の陽に紅葉の塔せり上がる

曳き売りの青物匂ふ冬の朝
鴛鴦の睦みをうかと驚かし
痛みほど晴れて切干日和なり
ぐる巻きのマフラー似合ふや青年期

岩手

遠藤 とく

こそばゆき事も記して日記果つ
CDを吊るし姑息な鳥威し
炉話や灰に描きし戦の地
トンネルの出口半円夕紅葉

千葉

小松 誠一

よべの色今朝に残して酔芙蓉
手焙りの灰ならしつと言さがす
本陣の跡のがらんと木守柿
村の子の見やう見真似の花神楽

愛知

浅井千代子

旧き世の佳さはさておきセロリ噛む
原始鳥類の骨かと蓮の枯れ切つて
村歌舞伎落葉が閉ざす舞台あり
小春風せはしく細し海女の笛

茨城

内山 花葉

つややかに煮て冬鯛のかぶとかな
まるめろや城下にひとつ女学校
鷹舞ふやたちまち山河拡がりぬ
冠木門のひだまりの奥冬の鴟

市川市

諸岡 和子

ひと椀に訛のぬくみ納豆汁
一村をからつぽにして芋煮会
流水の乾ききつたり雁渡し
爽籟や青きのれんの象牙店

千葉

佐々木よし子

鯛雲万太郎の字小さすぎ

病む人を密かに見舞ふ白障子
気が付けば一人離れて霜の道
木の实踏むぐらつと空を掴みけり
樹から樹へ光をつなぐ十二月
切餅の膨らむほどに哀しかり
裸木となりて空向く気概持つ
わが惑星を射抜く破魔矢を授からむ
真夜中の赤信号に冬ひそむ
鱧船の帰港に急ぐフオークリフト
きいんと空一枚となる寒さかな

静岡

手嶋 節子

神奈川県

菅原 健一

北海道

梶川智恵子

新人賞予選句（二月）

記憶よきことも罪なり十夜婆
にはとりのまなぶた重くとちて雪
木枯の野を熱くせり自久走
遠枯るものうつくしく眼鏡拭く
水と火の記憶の土偶山眠る
大年の河遡りくる潮かな
綿虫の浮力この世と思はれず
痛みほど晴れて切干日和なり
CDを吊るし姑息な鳥威し
旧き世の佳さはさてをきセロリ噛む

渡部 義雄

坂 ようこ

鈴掛 穂

福嶋千代子

矢崎すみ子

深田 雅敏

子安 教子

遠藤 とく

小松 誠一

浅井千代子

沖作品 選後句評

*
能村研三

記憶よきことも罪なり十夜婆 渡部 義雄

先月のこの欄でも述べたが渡部義雄さんは、沖の中央例会で欠席投句で毎月好成绩を取める方で、いくつ位のお歳の方でどのような方なのか知りたくなつた。今回投句された五句とも揃っている。お十夜は、十月から十一月にかけて行われる念仏会だが、昔はお年寄りが寺に泊まりこんで念仏供養を営んだ。この句の十夜婆も、そんな信仰心の篤いお年寄りの一人なのだろう。高齢化が進む現在、元氣なお年寄りもたくさんおられるが、やはり歳相応とでも言うのか、いつまでも昔のことを覚えているよりも、少しは物忘れがあったほうが実は暮らし良いのかも知れない。記憶よきことが逆に罪になるという屈折がこの句をおもしろくさせている。

にはとりのまなぶた重くとぢて雪 坂 ようこ

坂ようこさんも、渡部さんと同様句会ではお見かけしない人だが、このところ「沖作品」でめきめき力を発揮されている方だ。養鶏場のような所の鶏ではなく、鶏のまなぶたがしつかり

と観察できるのであるから、一般の家庭で飼われている一羽か二羽の鶏を詠んだものなのだろう。私の初期の頃の作品で「籠夜の鶏が夢見る白世界」という句があり、鶏の羽の白さから白を突きつめた句であるが、この句も今にも雪が降りそうな凍てついた日、寒さを堪えているかのように鶏が目を閉じた。するとそこに鶏の白さを際立たせるように白い雪に包まれた。白と白の配合をうまく効かせた句である。

木枯の野を熱くせり持久走 鈴掛 穂

「持久走」というから、「駅伝」や「マラソン」のような大きな大会ではなく、中高生の体育の授業時間に校外に出て、長距離を走るものなのだろう。私も中学時代体育の時間に校庭を出発し、枯れた田畑を横巨に見ながら、まだ舗装もされていない道をひた走つたことを思い出した。北風の木枯しに抵抗を受けながら走るのも辛いもので、走り始めた時は体も温まっていなくて調子も出ないものだが、次第に距離が増していくにつれ体も火照つてきて、回りの景色も熱くなってくる。この句はおそらく自分自身の体験を思い起しての句であろう。

遠枯るるものうつくしく眼鏡拭く 福嶋千代子

福嶋さんは前月巻頭一席だった人。眼鏡を拭くという日常の仕種と遠い野山が枯れていく美しさを遠近感を保たせながら、詠みこんでいる。眼鏡を拭く仕種のタイムイングは何かホツとした時で、眼鏡を外し息をふきかけながらレンズの曇りを磨いているのだが、裸眼に入ってくる遠くの景色も鮮明には見えないものの美しい。むしろ視覚的に捉えるというよりも、まわりの風景を心眼で捉えているのかも知れない。(以下略)